kosei
生かされ、生きるチカラ。

40年たって言えた、心からの「ありがとう」

岩国教会　河野守利さん

「お母さんが亡くなればよかったのに」当時17歳だった河野守利さんは母にそう悪態をついた。それは、14歳の時に父を亡くし、家計が逼迫して大学進学を断念した嘆きと、思春期の反抗心が相まった激しい怒りからくる暴言だった。以来、就職や結婚、三人の子宝に恵まれても母に冷たい感情を向け続け、いつかは関係を改善したいと願いつつも、40年もの歳月が経過していた。そんなとき、ある人の「母親のことをどう思っているのか?」という問いかけから、自らの生き方を見つめ直すことを諭される。これまで母はどんな思いだったのか――自問自答をくり返すと、激しい後悔が押し寄せてきた。そして、現在は介護施設に入所している母の手を握りながら親不孝を詫び、「産んでくれてありがとう」と伝えると、母はいつもの笑顔で「こちらこそありがとう」と手を握り返した。長年のわだかまりが霧散し、初めて心が通い合った瞬間だった。その後、認知症の進行した母はわが子を認識できなくなり、言葉を発することも少なくなったが、河野さんは、たとえ一方通行であっても母が旅立つその日までそばで見守り、命を授けてくれたことへの報恩感謝を自らの生きる姿勢で伝えていくつもりだ。

させていただく

私たち立正佼成会の会員は、ふだん何気なく「させていただきます」と口にします。それは、「おかげさまでとりくむことができます」「させていただけることがありがたい」という気持ちのあらわれです。ところが、この「おかげさま」や「ありがたい」を忘れてしまうと、「している」とか「してやる」といった自我が顔をだします。

そこで、たとえば「させていただく」の前後に「おかげさまで」や「ありがたい」を添えると、それがそのまま素直な気持ちになります。ものごとは形がとても大事であるといわれますから、繰り返し「おかげさまで、させていただけることがありがたい」と口にしていれば、縁起の教えがしっかりと胸に刻まれ、いつでも心からそういえるようになるのではないでしょうか。理想をいうと、そうなれば「させていただく」その感謝の実践は、仏・菩薩の遊戯三昧のような、とらわれのないうれしさ、楽しさにつながりそうです。

立正佼成会
www.kosei-kai.or.jp Eメール：info@kosei-kai.or.jp　〒166-8537 東京都杉並区和田2丁目11番1号　TEL.03-5341-1615